泉鏡花記念館・金沢能楽美術館共同企画「鏡花と能楽」展示報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/28177

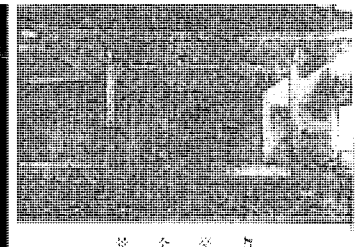
f. その他の展示―金沢能楽美術館―

（1） 下村観山

下村観山（1873～1930）は明治から昭和初期に活躍した日本画の大家の一人。明治6年、紀州徳川家お抱え幸流小鼓方の名門下村家の三男として和歌山県に生まれた。鏡花とは、母鈴の実兄金太郎の養子先松本弥八郎の姪の子という関係である。8歳のとき両親らとともに東京へ移住し、狩野芳崖に入門する。ちなみに芳崖と松本金太郎とは肝胆相照らす飲み仲間であったという。芳崖没後は彼の親友である橋本雅邦に師事し、17歳で東京美術学校（現・東京藝術大学）に入学。岡倉天心のもと、伝統的な狩野派や大和絵、琳派などの技法に西洋絵画の技法を取り入れて、近代的な日本画のスタイルを確立した。第一期生として卒業後は、同校の助教授となるが、天心が同校の紛争により排斥された際には行動を共にし、横山大観、菱田春草らとともに日本美術院の創設に参加した。

観山は遠縁である金太郎の酒席に頻繁に加わり、能楽関係者からは鏡花とともに変わり者の芸術家として認知されていたようである。

大正2年の宝生能舞台改築の際には鏡板の彩管を任され、宝生九郎からは松の画の高雅な出来栄えを賞賛された。松本長とも交流を深め、長の著作にもしばしば登場している。『弱法師』（東京国立博物館蔵）など、能を主題とした作品を多く残した。



新築されたる宝生会能舞台
鏡板　下村観山氏筆
『能楽』第11巻第12号
わんや書店　大正2年より転載

（左端）寿老　下村観山　絹本着色　大正～昭和時代　中村記念美術館蔵

（2）公開インタビュー「渡邊容之助氏が語る近代金沢能楽界のあゆみ」

インタビュアー：藤島秀隆（金沢能楽美術館館長）
参加者　約 100 名

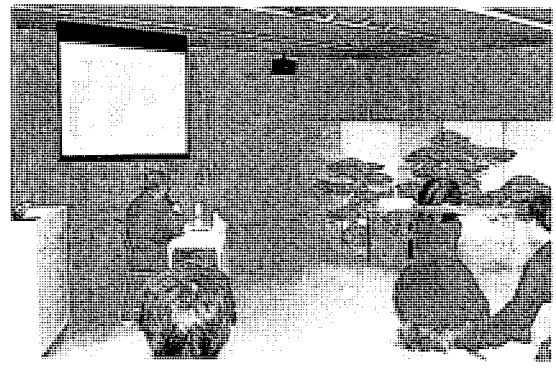
鏡花の能楽作品に影響を与えた伯父・松本金太郎や、その息子・長らは、17 世宗家の出身地であり、藩政期から宝生流が盛んであった金沢へたびたび来演している。東京にて宝生流の中枢を担っていた彼らである。金沢の能楽会へ与えた影響は、少なからぬものがあったろう。

シテ方宝生流の渡邊容之助師は、近代における金沢能楽界隆盛の象徴とも言える金澤能楽堂建設の前年、昭和 6 年（1931）に能楽師の家に生まれた。能楽堂が移築を経て今もなお石川県立能楽堂としてその歴史を刻んでいるように、容之助師の芸には金太郎、長からの薫陶が受け継がれ、そのあゆみは近代金沢能楽界の歴史そのものと言える。公開インタビューでは、金沢能楽美術館館長・藤島秀隆をインタビュアーに、戦前、戦中の緊迫した状況下での演能の想い出から、江戸時代の弘化勧進能を映画化した『獅子の座』に出演した際のエピソード、「道成寺」や「翁」など難曲の裏話、海外公演の紹介、そして加賀宝生の特質など、多岐にわたる貴重なお話を当時の写真を交えてお話くださった。最後には祝言小謡「高砂」の一節をご披露いただき、和やかな雰囲気のなか盛会のうちに幕を閉じた。

末筆ながら、インタビューを快くお引き受け頂き、山内の至らぬ進行にもかかわらず、終始にこやかにインタビューにお答え下さった渡邊容之助師をはじめ、ご聴講くださったみなさま、ご助力賜った泉鏡花記念館にこの欄をお借りして御礼申し上げる。

■渡邊　容之助　師　略歴■

昭和 6 年（1931）9 月 3 日、金沢市生まれ。6 歳で初舞台を踏み、シテ方として加賀宝生の普及、指導に尽力。昭和 24 年（1949）、宝生流職分。荀宝会会長。日本能楽会会員、北國宝生会理事長、能楽協会北陸支部相談役、金沢能楽会相談役、石川県能楽文化協会専務理事、石川県能楽楽師会理事などを歴任。昭和 61 年北國芸能賞受賞、平成 5 年石川県文化功労賞受賞、平成 6 年金沢市文化賞受賞、平成 10 年地域文化功労賞受賞（文部省）、平成 17 年旭日双光賞受賞。



（山内麻衣子）